

長野市立長野中学校・長野高等学校改革検討委員会委員アンケートまとめ

【探究学習と中高一貫教育】

<現状>

伝統的な「翼プロジェクト」を通じて、生徒自らが計画を立て、学外活動や文献調査を行う探究活動が当たり前の文化として定着している。特に、中学 3 年次に高校入試がない期間を活かして深化できる点は、他校を圧倒する強みである。

主として探究活動や国際活動に意欲的な中入生と、スポーツ等の部活動に注力する高入生が、同一の学級・空間で切磋琢磨する環境は、多様性を重視する現代社会で活躍する人材育成において極めて有意義である。

中学校段階における短期留学や「善光寺ウォーク」をはじめとする外国人とのコミュニケーション活動は、国際社会で活躍できる人材育成の観点から非常に有効に機能している。

<課題>

関心や意欲の重点が異なることは多様性確保の面で意義がある一方、学校全体の一体感を阻害する懸念がある。また、高校受験対策に代わり先取り学習を進める中入生にとって、その停滞は一貫教育の価値喪失に繋がりがかねない。さらに、中学時代の対話型授業が高校進学後に減少することへの不満も指摘されている。

以前に比べて中学生と高校生の交流が減少しており、中高一貫校としての期待に十分応えられていない。現状、中学の探究と高校の探究が分離している印象を与えている。

他校と比較して外部の専門家との関わりが少なく、探究活動のさらなる発展に向けて改善の余地がある。国際活動の継続性中学校で培った高い国際的な活動の成果を、高校段階においても途切れさせることなく継続できる仕組みが不足している。

<新たな取組>

全生徒が「地域の一員」として共通の目的を持てるよう、長野市と一体化した教育や地域連携活動を推進する。これにより、中入生・高入生の垣根を越えた一体感を醸成する。

中高生の混合チームによる合同活動や、高校段階での国際活動の継続など、中高接続の価値を高める仕組みを構築する。「そのプログラムがあるから中学から市立を選ぶ」と言われるような、魅力ある特色づくりを推進する。探究学習の高度化と組織的外部連携これまでの探究学習の実践成果を取りまとめて方法論を体系化するとともに、地元の大学等との組織的な連携を強化し、より高度な探究活動を展開する。

【グローバルな人材育成】

<現状>

市立長野では、中学校における「短期留学」や「善光寺ウォーク」をはじめとする外国人とのコミュニケーション活動が大きな強みとなっており、国際社会で活躍できる人材の育成に繋がるものとなっている。

中入生のニーズと国際学習や探究活動、海外と触れ合える点に魅力を感じて入学する生徒が多い。

<課題>

市立長野に魅力を感じて入学したものの、中学校での先進的な活動を高校進学後も継続・発展させられないと感じている生徒が多い。

また、高校からの進学者と、学習に対する意識や英語力の差が大きく、両者が共通の目的を持って活動できる環境となっておらず、中高連携の継続性、中学校での質の高い国際活動が、高校進学後に十分に継続・接続しきれていない。

<新たな取組>

中学3年生の高校入試時期（中入生の特権的タイミング）に、従来の修学旅行とは異なる独自の海外研修プログラムや、中高一貫の強みを活かした渡航・留学機会の拡充「新海外研修プログラム」など検討する。

また、オンラインシステムを日常的に活用し、現地に赴くだけでなく、校内にいなから海外とつながるリアルタイムな交流・学習機会を創出も考えられる。

更なるグローバル化に対応するため、在学中から地元の産業、企業、行政と深く交わる機会を設けることにより、「世界（グローバル）」を視野に入れ、世界に羽ばたく力を育みながらも、将来的に地元へ定着・還流し、「足元の地域（ローカル）」にも貢献できる、これからの国際社会・地域社会の双方をリードする人材を育成する。

【AX時代の論理的思考の育成】

<現状>

業務においてAIの活用が必須となり、DX（デジタルトランスフォーメーション）による根本的な仕事のやり方の変革が求められており、国が「高校教育改革に関する基本方針（N-E.X.T.ハイスクール構想）」を策定・公表し、「産業イノベーション人材育成等に資する高等学校教育改革促進事業」を実施している。

本校においては、探究学習における「翼プロジェクト」などの取り組みや、総合学科の強み、国際理解教育（英語教育含む）など、基礎的な基盤となる取り組みが実践され

ている。

<課題>

急激に人口減少が進行する中において、一般化するD Xや日常生活に不可欠になるであろうA Iを使いこなすことができる人材や、変化する社会を見据え、仕事のやり方や「常識」を根本から変革できる発想力を持った人材の育成が急務となっている。

一般的には、学校における「学び」が実社会における「課題解決」に結びつかない事例がしばしば見受けられることから、I C T機器の活用やシステム導入だけでなく、実社会との関りを深め「探究学習」をより深化させるほか、指導者のより高い現状や課題認識や意識改革などの必要がある。

<新たな方向>

D Xの推進、A Iの活用においては、単に機器の活用やシステム導入ではなく、「視座の高い論理的な課題把握力」「説明力」「交渉力」を身につけ、上流・下流の状況を正確に把握することがより重要となる。

また、より高度な探究活動を展開するために外部教育機関との組織的な連携・協働の推進、地元企業でのインターンシップや、実社会に近い課題解決（PBL）などをおして、全体最適を見据えたトランスフォーメーションを牽引できる、高い視座を持った論理的思考力やネゴシエーション能力を養う教育課程を構築する。

【部活動強化と指導者確保】

<現状>

専門知識を有する指導者の存在と、県大会における上位進出、全国大会出場を狙える大変充実した施設設備が学校の大きな強みとなっている。

そして世間の注目を集めるスポーツでの活躍は「市立長野」の重要なブランド価値であり、「スポーツだけなら私立、勉強もできるから市立」という独自の評価を獲得している。

主としてスポーツに打ち込む「高校からの入学者（高入生）」と、探究や国際活動に意欲的な「中学からの入学者（中入生）」が同じクラスルームで切磋琢磨する環境は、現代社会に求められる多様性の実践に大きく寄与している。

<課題>

中入生と高入生の意識・関心が異なっており（中入生：学習・探究 vs 高入生：スポーツ・部活動）、学校全体の一体感の醸成を難しいものとするリスクがある。両者のアイデンティティをいかに尊重するかが大きな課題である。

スポーツの実績だけでなく「勉強もできる」という「文武両道」の期待に応え続けるための糸口が必要とされている。

現在の指導者は県教委の人事異動に依存しており、安定、継続した人材の確保は不安定な状況にあり、「市立長野」のブランドを維持するためには外部コーチやトレーナーなど、より安定した専門性の高い人材の招聘、連携する必要がある。

また、「市立長野に赴任すれば指導力を磨くことができる」と異動を希望するような、教員側のモチベーションを高める環境づくりが未だ発展途上である。

<新たな方向>

探究学習への関心が高い中学校入生とスポーツ部活動に重点を置く高入生それぞれが大切にしているものを理解、尊重し、「市立長野」として一体感の醸成を図ることができるよう、合同で、同じ時間に活動・対話できる仕組みを構築する。

外部コーチやトレーナーによる専門的な指導を技術の向上だけでなく、生徒自身の傷害予防やコンディショニングなど「セルフケア能力」の向上などへ教育的な応用としても活用する。これにより、パフォーマンス向上だけでなく、将来スポーツ選手を支える側に回る生徒の充実感や学びにも繋げることが可能となる。

「市立長野」のブランド力をさらに高めるため、地元プロ傘下チーム、海外 U18 年代チーム（サッカー）、日本スケート連盟や地元社会人オリンピック選手（スピードスケート）等との外部連携を積極的に模索する。

熱意ある教員・指導者が市立長野への異動を希望する施設・環境の整備・充実、指導力を磨くことができる学内環境や評価制度を整備する。